

仮名写本における「改行」と「文字使用」 —正徹奥書本源氏物語の事例から—

斎藤 達哉

はじめに

本稿は、仮名伝本の書写行為が行われる際に表記上に生じる変異について検討することを目的としている。

ここでは、仮名写本の中でも伝本数が多いもの一つである源氏物語を取り上げたい。源氏物語の諸伝本は、それぞれが個性を持っている。源氏物語は、平安京（京都）を舞台とした物語文学で、筋書きが大きく異なる「異本」はないが、『源氏物語大成』や『源氏物語別本集成』などによって、句や語の違いが「校異」「異文」として報告されてきている。さらに、こうした校異・異文が見られない同文であっても、原本の「表記情報」を比較すると、一致する伝本はほとんど見られなくなる。

「表記情報」という用語は今西祐一郎氏の提唱したものである。例えば、今西（2009）では、大島本について、「哀／あはれ」「侍／はべり」といった表記の違いが巻によって偏在していることを根拠に、同本が複数筆者の寄せ書きもしくは取り合わせ本であったという考え方を提示している。本稿では、表記情報の範囲を、漢字／仮名の表記の違いに加え、漢字の含有率の違い、使用された異体仮名の違いについても検討する。

漢字／仮名の表記の違いは、ある語を漢字と仮名のどちらを用いるか（例えば、タマフを「給ふ」と書くか「たまふ」と書くか）の差を見ることがある。漢字含有率の違いは、その写本の全体文字数の中に含まれる漢字の割合の差を見ることがある。異体仮名の違いは、字母の異なる同音の仮名（異体仮名）のどれを用いるか（ハの仮名を「者」と書くか「八」と書くか）の差を見ることがある。とくに、異体仮名の情報は、翻刻によって現代通用の文字に置き換えられ、差が見えなくなってしまう性質のものである。そのため、活字本文を使った比較では見過ごされてきた感がある。

影印あるいは実際の伝本から得られる「表記情報」を比較すると、校異や異文がほとんど見られない伝本間にも、多数の違いを見出すことができる。表記情報の比較検討は、伝本の相互関係の分析を進める手段としての可能性を持っているのである。

冒頭に述べたとおり、稿者の目的とするところは、書写行為が行われる際に表記上に生じる変異について検討することである。その事例として、極めて近い本文をもつ源氏物語の2伝本

を検討材料として用いる。以下の 1.においては、検討材料とする源氏物語 2 写本の類似性について説明する。2.では、書写に際してどの程度の注意が払われているかという「書写態度」を見極めるための手掛かりとして、「改行箇所の一致状況」による分類を試みる。3.では、語を表記する際の「漢字／仮名の違い」について調査し、漢字／仮名の違いまでが、写しとるべきものに属していたのか、書写者の恣意に属していたのかを検討したい。4.では、〔漢字含有率〕と〔仮名種類数〕とから諸伝本の中での 2 写本の位置付けを確認するとともに、仮名字種（異体仮名）が、写しとるべきものに属していたのか、書写者の恣意に属していたのかを検討したい。

1. 正徹奥書本源氏物語 ——国文研本と慶應大学本の類似性

本稿では、源氏物語伝本のうち国文学研究資料館蔵本と慶應義塾図書館蔵本とを取り上げる。この二つの写本は、正徹奥書本といわれる写本群に属している。正徹奥書本は、室町前期の歌僧である正徹（1381～1459 年）が嘉吉 3 年に書写した旨の奥書を有している写本群である。

菅原（2010）は、正徹奥書本として、

- (1) 徳本正俊氏旧蔵本
- (2) 金子元臣氏蔵本
- (3) 国文学研究資料館蔵本
- (4) 慶應義塾図書館蔵本
- (5) 京都女子大学附属図書館吉沢文庫蔵本（桐壺）
- (6) 天理図書館蔵本（桐壺、早蕨、東屋）
- (7) 大阪青山短期大学蔵本（蜻蛉）

の 7 伝本の存在を報告している。

このうち、(1)は所在不明であり、(2)は戦火焼失とされている。(3), (4)は 54 卷が揃っている。(5)の吉沢文庫本は、加藤（2001）が「その所持本から正徹自身が、長禄 3 年（1459）に書写した本ということになろう」（59 ページ）と指摘するように、注目される伝本¹である。しかし、桐壺しか伝存しない零本である。(6), (7)も同様に零本である。

本稿では、表記情報の巻ごとの偏在に着目するため、完本である「(3) 国文学研究資料館蔵本」と「(4) 慶應義塾図書館蔵本」とを取り扱うこととする。2 写本の概略について記すと、以下のとおりである。

¹ 久保木（2006）でも、「嘉吉 3 年本を長禄 3 年（1459）に正徹自ら転写したのがこの吉沢文庫本であるとおぼしい」（545 ページ）と述べる。

◇国文学研究資料館蔵本（以下では「国文研本」と略す）

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構国文学研究資料館（東京都立川市緑町10-3）が所蔵する（請求記号：サ4/75/11）。

縦23.3cm×横17.2cm、鳥の子紙、列帖装（綴葉装）。1面は10行で書かれ、和歌は行頭2字下げで書かれる。和歌の末尾とそれに続く本文との間は改行せずに続けて書かれている。朱合点、傍書等が認められる。書写時期は、「近世初期」（伊藤（2002））とされる。

正徹名の奥書は、桐壺、帚木、空蝉、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀の7巻に存する。

◇慶應義塾図書館蔵本（以下では「慶應大本」と略す）

慶應義塾図書館（慶應義塾大学三田メディアセンター、東京都港区三田2-15-45）が所蔵する（請求記号：132X/158/1）。

縦24.6cm×横17.8cm、鳥の子紙、列帖装（綴葉装）。1面は10行で書かれ、和歌は行頭2字下げで書かれる。歌の末尾とそれに続く本文との間は改行せずに続けて書かれている。朱合点、傍書等がある。書写時期は、「江戸初前期」（慶應義塾図書館（2007））とされる。

正徹名の奥書は、桐壺、帚木、空蝉、夕顔、若紫、末摘花の6巻に存する。このほか、花宴、葵の2巻にも奥書があると見る説²もある。しかし、この2巻の巻末に書かれた内容は、校正作業にかかる記録であり、親本からの書写の経緯を記録した奥書とは区別されると考えたい。

国文研本と慶應大本との奥書は、ほぼ同じものである。たとえば、「1桐壺」では以下の四種が両写本に存在する。

- (ア) 写本云 此一部……千松末葉清嵐正徹判
- (イ) (校本云) 去正応四年……通議大夫藤為相判
- (ウ) 以多本……嘉吉三年初秋中七日 重而書之判
- (エ) 当写本(二)云 此卷初三枚余同巻之名招月真筆也……文安三年六月日 宗耆判
(丸括弧の中は慶應大本だけにある記述)

さらに、2写本間の校異は極めて少ない。

これだけでは、甲が乙を写したという親子関係を論証することも、甲、乙が丙を写したという兄弟関係を論証することもできない。しかし、書写者が正徹名の奥書の存する本に権威を感じているという点は共通であって、書写行為はある程度の慎重さを持って行われるであろう。

² 慶應義塾図書館（2007）など。

ケアレスミスによる誤写が幾らか含まれたとしても、類似した本文が出来上することは十分に予想される。国文研本と慶應大本の類似は、書写者の価値観が共通していたために生じたと捉えておきたい。奥書の共有と校異の少なさとから、「正徹奥書のある本を善本だと考える集団内で生産された極めて近い本文」と規定した上で、以下調査を進めていく。

2. 改行箇所の一致状況から書写態度を見る

国文研本と慶應大本とは、奥書が共通することと校異の少なさとによって、類似する写本と判断できる。しかしながら、書写態度は同一ではない。以下では、書写に際してどの程度の注意が払われているかという「書写態度」を見極めるための手掛かりとして、改行が行われる箇所の一致状況に着目する。

2.1 改行箇所の一致を点数化する

改行の一致・不一致の様子を比較する手段として点数化を試みた。改行箇所の一致状況の点数化は、以下の基準で行った。用例中に記した記号「」は行末であることを示し、記号「」は面の末尾であることを示す。

(1) 改行箇所が完全一致した場合 (1点)

(例) 国文研本： …ものおもはしさはいつと」なき事なめれと… (11花散里・1才1~2行目)

慶應大本： …ものおもはしさはいつと」なき事なめれと… (11花散里・1才1~2行目)

(2) 改面箇所が一致した場合 (3点)

(例) 国文研本： …名残れいの『御心なれはさすかに… (11花散里・1才10行目~1ウ1行目)

慶應大本： …名残れいの『御心なれはさすかに… (11花散里・1才10行目~1ウ1行目)

(3) 改行箇所のずれがあつても、前後の文節にまで及ばない場合 (0.5点)

(例) 国文研本： …世のおほえはな』やかなる御方／＼にも… (1桐壺・2才8~9行目)

慶應大本： …世のおほえはなや』かかる御方／＼にも… (1桐壺・2才5~6行目)

(4) 改面箇所のずれがあつても、前後の文節にまで及ばない場合 (1.5点)

(例) 国文研本： …聞えさせ給へと聞え『給もいと… (17絵合・2ウ10行目~3才1行目)

慶應大本： …聞えさせ給へと聞え『え給もいと… (17絵合・2ウ10行目~3才1行目)

(5) 不一致 (上記(1)~(4)に該当しない場合) (0点)

(例) 国文研本： …女御更衣あまた』さふらひ給けるなかに… (1桐壺・1才1~2行目)

慶應大本： …女御更衣あまたさふらひ』給けるなかに… (1桐壺・1才1~2行目)

対象とした個所は、各巻とも冒頭からの 40 箇所の改行箇所である。すべての改行箇所が一致すると 48 点（改行一致 1 点×36 箇所、改面一致 3 点×4 箇所）となる。

冒頭からの 40 箇所は、原則として「1 丁表 1 行目→2 行目への改行」から「2 丁裏 10 行目→3 丁表 1 行目への改行」までである。ただし、和歌の始まりを含む行は除外し、その行に代わるものと「3 丁表 1 行目→2 行目への改行」以降に求めた。国文研本、慶應大本とともに、和歌の始まりは行頭 2 字下げで始まるという書式が固定されているからである。

2. 2 改行箇所の一致状況の比較 ——一致が多い巻と少ない巻

上記の方法で改行箇所の一致状況について点数化をした結果、改行箇所の一致が多い巻と一致が少ない巻とがあることが分かった。以下は、54巻を改行箇所の一致状況に応じて、A～E の 5 群に分類したものである。

A群 48.0～40.0 点

7 紅葉賀, 11 花散里, 15 蓬生, 16 閑屋, 18 松風, 19 薄雲, 20 朝顔, 21 少女,
22 玉鬢, 23 初音, 24 胡蝶, 25 蛍, 26 常夏, 27 篠火, 28 野分, 29 幸行, 32 梅枝,
33 篠裏葉, 34 若菜上, 35 若菜下, 36 柏木, 37 横笛, 38 鈴虫, 39 夕霧, 40 御法,
41 幻, 42 勾宮, 43 紅梅, 44 竹河, 45 橋姫, 46 椎本, 47 総角, 48 早蕨, 49 宿木,
50 東屋, 51 浮舟, 52 蜻蛉, 53 手習, 54 夢浮橋

B群 39.5～30.0 点

14 潤標, 30 藤袴, 31 真木柱

C群 29.5～20.0 点

17 総合

D群 19.5～10.0 点

3 空蝉, 6 末摘花, 8 花宴

E群 9.5～0 点

1 桐壺, 2 帚木, 4 夕顔, 5 若柴, 9 葵, 10 賢木, 12 須磨, 13 明石

まず、改行箇所の一致状況ということについて考えてみたい。

本稿末には、A 群の例として「11 花散里」の影印を示した。**写真 1** は「国文研本・1 丁表」、**写真 2** は「慶應大本・1 丁表」である。2 写本の改行箇所は一致が多く、A 群に分類された巻の書写では、改行に注意が払われたという解釈ができる。A 群の巻は、正徹奥書祖本の改行箇所を知るための材料となりうる。

一方、E群の例として「1桐壺」の影印を示した。写真3は「国文研本・1丁表」、写真4は「慶應大本1丁表」である。改行箇所の一致が少ない巻（E群に分類された巻）は、改行に注意が払われていないことになり、この書写態度が祖本の改行箇所を見えにくくしている。どちらか1本が祖本の改行箇所を残しているかもしれないし、2本とも祖本の改行箇所を失ってしまっているかもしれない。

次に、改行箇所の一致状況と、奥書の有無との関係について考えてみたい。表1は、各巻の点数、群への分類と、正徹名奥書の有無とを対照させたものである。

表1 改行箇所の一致度と奥書の有無

巻名	改行の一一致度		奥書の有無		注
	点数	群	国文研本	慶應大本	
1 桐壺	3.0	E	○	○	
2 带木	6.5	E	○	○	
3 空蝉	12.5	D	○	○	
4 夕顔	7.0	E	○	○	
5 若紫	5.5	E	○	○	
6 未摘花	12.5	D	○	○	
7 紅葉賀	43.5	A	○	×	
8 花宴	12.0	D	×	△	△=正徹名なし。書写者校正記録
9 葵	9.0	E	×	△	△=正徹名なし。書写者校正記録
10 賢木	9.5	E	×	×	
11 花散里	43.5	A	×	×	
12 須磨	5.5	E	×	×	
13 明石	7.0	E	×	×	
14 淳標	36.5	B	×	×	
15 蓬生	43.5	A	×	×	
16 間屋	44.5	A	×	×	
17 絵合	22.0	C	×	×	
18 松風	44.5	A	×	×	
19 薄雲	45.5	A	×	×	
20 朝顔	44.5	A	×	×	
21 少女	43.0	A	×	×	
22 玉鬘	46.5	A	×	×	
23 初音	44.5	A	×	×	
24 胡蝶	45.0	A	×	×	
25 蛍	43.5	A	×	×	
26 常夏	47.0	A	×	×	
27 舞火	41.0	A	×	×	
28 野分	44.5	A	×	×	
29 幸行	42.0	A	×	×	
30 藤袴	36.5	B	×	×	
31 真木柱	39.5	B	×	×	
32 梅枝	43.0	A	×	×	
33 藤裏葉	47.0	A	×	×	
34 若菜上	43.0	A	×	×	
35 若菜下	44.0	A	×	×	
36 柏木	46.5	A	×	×	
37 横笛	45.0	A	×	×	
38 鈴虫	46.5	A	×	×	
39 夕露	46.0	A	×	×	
40 御法	46.5	A	×	×	
41 幻	44.5	A	×	×	
42 匂宮	46.0	A	×	×	
43 紅梅	44.0	A	×	×	
44 竹河	45.0	A	×	×	
45 橋姫	46.5	A	×	×	
46 椎本	42.0	A	×	×	
47 総角	46.5	A	×	×	
48 早蕨	44.5	A	×	×	
49 宿木	46.5	A	×	×	
50 東屋	44.5	A	×	×	
51 浮舟	45.5	A	×	×	
52 蜻蛉	43.5	A	×	×	
53 手習	45.0	A	×	×	
54 夢浮橋	43.5	A	×	×	

改行箇所の一致が少ない巻は、初めの方の巻に集中している。集計に先だって、稿者は、正徹名の奥書を有する初めの方の巻ほど改行箇所が一致するのではないかという予測を持っていた。しかし、実際に集計して見ると、奥書を有する巻ほど改行箇所に不一致が生じているということが分かった。奥書が共通していることをもって近い写本とされることがあるが、書写態度という面では必ずしもそうは言えないことに注意しなければならない。

ともかく、国文研本と慶應大本の改行箇所を比較した結果、どちらかの本（あるいは双方）は、巻によっては書写態度が異なることが判明した。国文研本も慶應大本も、それぞれ一筆（同一筆跡）の写本である。一揃いの写本が一筆であるという現状は、必ずしも書写態度の一貫性

を保証するものではないということになる。

奥書の有無と改行の一致状況とには、何かしらの理由があるのかもしれない。しかし、稿者の立場（文字・表記）からはその理由を見出すことは難しいので、ここでは追求を控える。

3. 語の表記を比較する ——漢字で書くか仮名で書くか

国文研本と慶應大本との間では、同一箇所の同一語について、漢字で書くか仮名で書くかという文字選択の差が見られる。改行に注意を払って写された巻では差が少なく、改行に注意が払われていない巻では差が目立っている。漢字／仮名の選択は、注意深い書写においては、写しとるべきものに属する。このことについて、以下の3.1～3.3で論じる。

3.1 使用された漢字の種類（使用字種）の共通性

まず、国文研本と慶應大学本との使用漢字の字種について見ておきたい。

54巻の各巻冒頭40行ずつ（全2160行）の中に使われた漢字の字種は、国文研本370字種、慶應大本373字種で、以下に示した漢字群となっている。国文研本で使われている370字種は慶應大本でも使われているものである。慶應大本だけに見られたのは「紀」「升」「村」の3字種だけであって、2写本間での漢字の使用字種の差は大きくなない。

(1) 国文研本と慶應大本とに共通して使用された漢字（370字種）

阿、哀、鮎、伊、位、衣、井、一、引、院、右、宇、雨、卯、浦、雲、衛、宴、苑、遠、横、王、荻、屋、音、下、何、夏、家、河、火、花、過、霞、我、賀、会、皆、外、垣、隔、貫、間、閑、岸、岩、願、忌、帰、氣、祈、微、貴、久、官、弓、給、京、供、共、卿、橋、鄉、曉、玉、錦、琴、近、九、具、空、君、契、形、景、経、結、月、權、見、元、原、源、言、限、古、故、枯、五、後、御、暮、光、口、后、幸、広、弘、更、江、紅、荒、行、講、香、高、国、此、今、恨、佐、左、宰、栽、斎、罪、桜、三、山、散、残、四、始、子、師、思、枝、氏、糸、柴、事、似、侍、寺、持、時、治、式、七、捨、車、守、手、朱、首、秋、舟、衆、住、十、従、宿、出、春、初、所、女、将、小、少、承、松、消、裳、上、常、情、条、植、色、心、深、申、神、臣、親、身、人、仁、尋、吹、水、隨、数、杉、雀、澄、世、瀬、勢、成、星、晴、正、清、生、声、西、青、昔、石、跡、折、雪、絶、蟬、先、千、川、浅、染、前、僧、漕、相、草、藻、霜、藏、息、袖、其、打、待、苔、代、大、鷹、滝、誰、歎、男、地、池、竹、中、丁、朝、鳥、壺、帝、庭、弟、程、笛、伝、殿、渡、都、冬、嶋、東、当、藤、頭、堂、道、督、独、内、馴、南、二、式、匂、廿、日、入、忍、年、之、納、波、馬、梅、萩、白、箱、八、妃、彼、比、姫、百、氷、品、

浜，婦，父，部，風，服，仏，物，分，文，聞，兵，別，辺，返，弁，暮，母，奉，方，法，坊，忘，房，北，墨，本，枕，又，務，夢，無，名，命，明，茂，木，問，門，也，夜，野，柳，有，猶，夕，余，与，楊，葉，養，來，賴，覽，梨，里，立，龍，旅，両，涼，林，涙，嶺，麗，恋，路，露，郎，六，和，侘，哥，屏，泪，炬，當，禊，聲，藪，闇，鶯，鵠，狼

(2) 慶應本だけに使用された漢字 (3字種)

紀，升，村

3.2 漢字を多く使うか仮名を多く使うか ——改行箇所の一致状況と運動

仮名文では、助詞、助動詞のように原則として仮名³で書かれるものもあるが、仮名でも漢字でも書かれる語もある。ある語を書く文字として漢字を用いるか仮名を用いるかは一つの本の中でも一定していない場合が多く、国文研本も慶應大本も例外ではない。同一箇所の同一語を書くときに漢字を用いる場合も仮名だけを用いる場合もあり、見方によっては1本の中での表記が固定化していないとも言える。

2.1に示した各巻の冒頭2丁ずつの範囲について、2写本を比べてみる。同じ文脈の同じ語の表記について、仮名と漢字の文字の違いが見られる箇所数を調べると以下のとおりで、全体的には、国文研本の方が仮名で書くことが多い。

- ・国文研本=仮名 : 慶應大本=漢字 ……49 篇所
- ・国文研本=漢字 : 慶應大本=仮名 ……23 篇所

この数字について、さらに巻別の内訳を示したものが表2である。

漢字表記と仮名表記の違いが見られる箇所は、改行箇所の一致状況の差による分類（群）とも、奥付の有無とも、完全には重ならない。それでも、「国文研本=仮名：慶應大本=漢字」は、「1桐壺」～「6末摘花」（正徹名奥書を有する巻で、なおかつD・E群）に集中していることに注目したい。「1桐壺」～「6末摘花」では、国文研本が仮名、慶應大本が漢字という傾向がはつきりしている。漢字／仮名の選択が一致するかしないかは、改行箇所の一致状況に、完全ではないけれども連動することがうかがわれる。

³ 例外としては、助動詞ナリを「也」と書くような場合もある。

表2 仮名表記と漢字表記の違いが見られる箇所数

卷名	国文研本=仮名 慶應大本=漢字	国文研本=漢字 慶應大本=仮名	卷名	国文研本=仮名 慶應大本=漢字	国文研本=漢字 慶應大本=仮名
1 桐壺	4	1	28 野分		
2 帛木	2	1	29 幸行		
3 空蟬	1		30 藤袴		1
4 夕顔	3		31 真木柱		
5 若紫	4		32 梅枝		
6 末摘花	3		33 藤裏葉		
7 紅葉賀	1	2	34 若菜上		
8 花宴	7		35 若菜下	1	
9 葵	3	1	36 柏木		
10 賢木	1		37 横笛		
11 花散里		1	38 鈴虫		
12 須磨	1		39 夕霧	1	
13 明石	1		40 御法	1	1
14 濚標	1	2	41 幻		1
15 蓬生	1	2	42 勾宮		1
16 閨屋	4	2	43 紅梅	1	
17 絵合			44 竹河		
18 松風			45 橋姫	1	
19 薄雲			46 椎本		
20 朝顔	1	1	47 総角		1
21 少女		1	48 早蕨	1	
22 玉鬘	1		49 宿木	2	
23 初音	1		50 東屋		
24 胡蝶		2	51 浮舟		
25 螢	1	1	52 蜻蛉		
26 常夏			53 手習		
27 篠火		1	54 夢浮橋		

3.3 タマ（タマフ・タマハル・ノタマフ）の表記

国文研本の最初の方の巻では、慶應大本が漢字表記する語を仮名で書く傾向が見られる。このこと具体的な例として、タマフ、タマハル、ノタマフの「タマ」の表記を例にして紹介する。

正徹名の奥書を有しかつE群に分類される巻のサンプルとして「1 桐壺」全文、および、奥書がなくかつA群に分類される巻のサンプル「11 花散里」全文を取りだし、漢字「給」、仮名「たま」の数を集計したものが表3である。

「1 桐壺」では、国文研本の方で仮名「たま」が多く、慶應大本の方で漢字「給」が多いというように、漢字／仮名の使用傾向の差が見られる。一方、「11 花散里」では、2写本とも漢字「給」が多く、漢字／仮名の使用傾向に差を見出すことはできない。改行箇所の一致が多い「11 花散里」では、漢字／仮名の違いも写すべきものとして認識されていたと解釈できる。

表3 桐壺・花散里におけるタマの表記

		漢字「給」	仮名「たま」
1 桐壺	国文研本	76	179
	慶應大本	215	34
11 花散里	国文研本	24	1
	慶應大本	25	1

ところで、「11 花散里」での漢字／仮名の使用傾向から類推すると、「1 桐壺」の国文研本で仮名「たま」が多いのは特異な状況に見える。E群に属する巻において、改行に注意が払われず、漢字／仮名の違いが写しとられなかつたのは国文研本の方という可能性が高い。

4. 文字使用の状況から見た国文研本・慶應本の位置

以下では、文字使用の状況を〔漢字含有率〕と〔仮名種類数〕との二面から分析する。これまで、国文研本と慶應大学本とを対照してきたが、〔漢字含有率〕〔仮名種類数〕の分析に当たっては、2写本の比較だけでは、違いが見えない面がある。そこで、2写本が諸伝本の中でどのような位置にあるのかを併せ見ながら検討したい。以下では、改行箇所の一致が少ないE群の例として「1桐壺」を、改行箇所の一致が多いA群の例として「11花散里」を検討していく。

4.1 文字使用の状況 ——漢字含有率と仮名種類数

文字の使用状況を比較するための数値として、まず、ある巻の全文字数のうち漢字がどのくらいの割合を占めるかといった〔漢字含有率〕⁴を取り上げることにする。3.2, 3.3ではE群に属する「1桐壺」の比較において、国文研本の方は仮名表記が多く、慶應大本の方は漢字表記が多く、2写本間の漢字の割合に差が見られた。

もう一つ、ある巻で使われている仮名の字種が何種類あるかといった〔仮名種類数〕⁵を取り上げる。源氏物語のような仮名文の表記では、同音に複数の異体仮名が使用される。異体仮名は、時代や資料によって変化が生じていることが報告されている⁶。本稿では、異体仮名の使い分けまでは言及しないが、〔仮名種類数〕を知ることで、個々の伝本の仮名表記が整理されたな仮名表記なのか、変化に富んだものなのかを、おおよそ知ることができる。

⁴ [漢字含有率] は、「総漢字数÷総文字数」の結果を百分率で算出した。「総文字数」は文字の異なりの総数で、判読不明の文字及び重点（踊り字）も計上している（重点「ゝ」は1文字、重点「／＼」は2文字として機械的に集計）。

⁵ [仮名種類数] は、仮名の字母に基づいて種類を数えた。例えば「れ」「お」は、字形は異なるものの字母を一にするので1種類としている。

⁶ 前田(1971)など。

〔漢字含有率〕も〔仮名種類数〕も、2写本だけの比較では差を見極めにくいので、他の伝本とともに検討することにした。

4.2 比較対象とした諸伝本

比較に使用した諸伝本は、以下の20種で、写本のほかに古活字本、整版本を含めている。古活字本、整版本は写本とは異なるメディアである。しかし、いずれも筆で書かれた文字を土台としているものなので、写本に準ずるものとして比較材料に含めた。なお、整版本では、振り仮名、濁点が付いているが、集計では、それらを除く本行本文のみを対象としている。

〔写 本〕

専：専修大学本、桐壺のみ（専修大学図書館蔵伝為秀筆本、請求記号 A/913.3/Mu56）

明：明融本（『源氏物語 明融本』東海大学出版会、1990年）

日：日大本（『日本大学蔵 源氏物語』八木書店、1994年）

青：書陵部本（『宮内庁書陵部蔵 青表紙本源氏物語』新典社、1969年）

各：各筆源氏（『御物 各筆源氏』貴重本刊行会、1986年）

陽：陽明文庫本（『陽明叢書国書篇 源氏物語』思文閣書店、1979年）

穂：穂久邇本（『源氏物語』貴重本刊行会、1979-1980年）

大：大島本（『大島本 源氏物語』角川書店、1996年）

伏：伏見天皇本（『源氏物語 伏見天皇本』古典文庫、1991-1995年）

保：保坂本（『保坂本 源氏物語』おうふう、1996-1997年）

正：大正大本（<http://www.tais.ac.jp/lib/article.html>）

米：米議会本（米国議会図書館アジア部日本課蔵、LC Control No.2008427768）⁷

飯：飯島本（『飯島本 源氏物語』笠間書院、2009年）

高：高松宮本（『源氏物語 高松宮御藏河内本』臨川書店、1973年）

尾：尾州家本（『尾州家河内本 源氏物語』貴重本刊行会、1977年）

〔古活字本〕

会：国会図書館古活字本（慶長古活字本、請求記号 WA7/263、http://rarebook.ndl.go.jp/pre/servlet/pre_com_menu.jsp）

九：九大古活字本（九州大学附属図書館、請求記号 国文/17F/94、http://mars.lib.kyushu-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002rare2）

⁷ 33巻までの各巻第1丁表面の画像は、国立国語研究所のweb「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻本文」（代表者：高田智和）<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>で閲覧可能である。

〔整版本〕

湖：湖月抄（『源氏物語湖月抄』、国立国語研究所図書館蔵、請求記号 W67/Ki68）

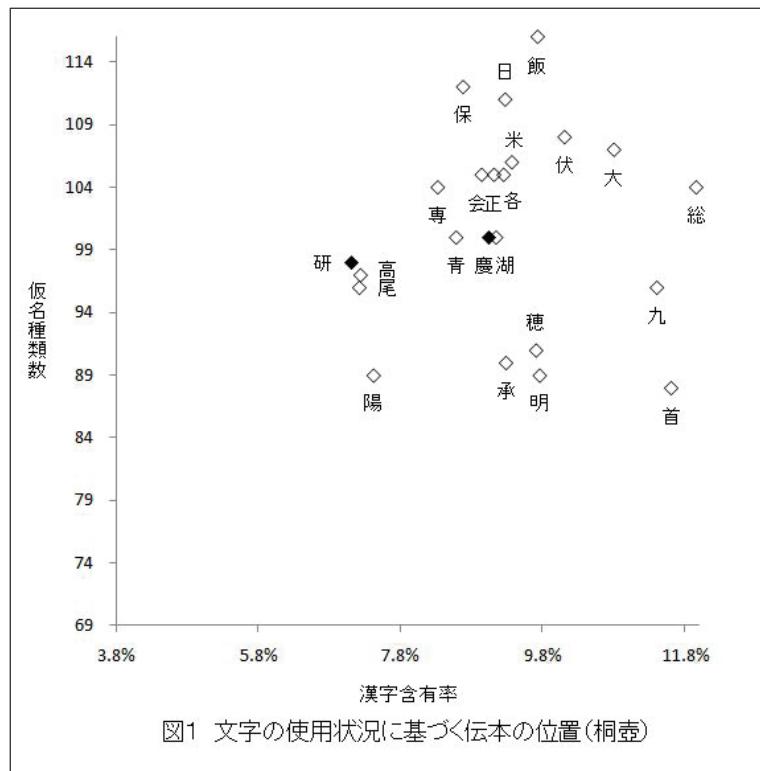
首：首書源氏（『首書源氏物語』和泉書院、1980-1992年）

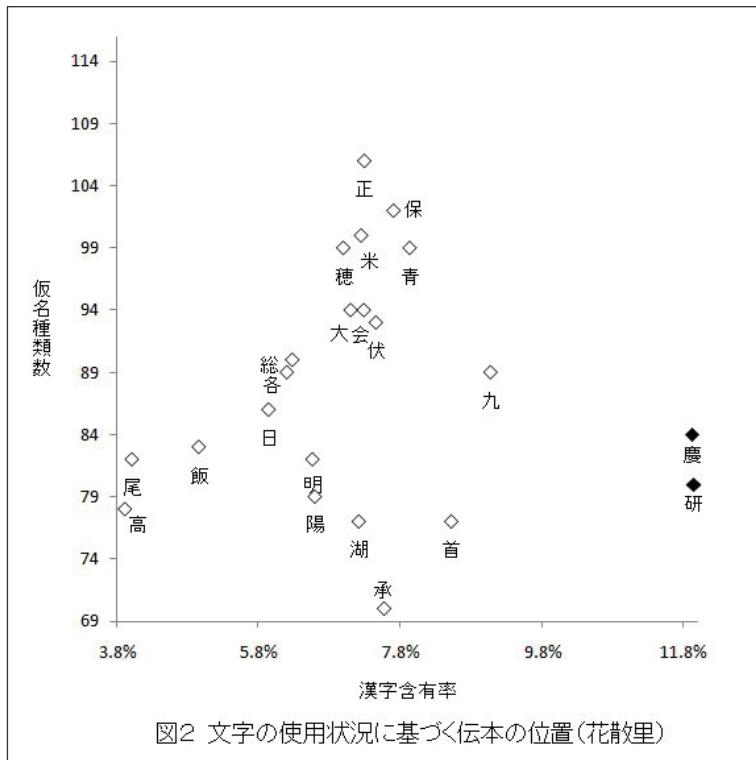
承：承応三年絵入源氏（米国議会図書館アジア部日本課蔵、LC Control No.2004551302、<http://lcweb4.loc.gov/service/asian/asian0001/2005/2005html/20050415toc.html>）

4.3 比較結果 ——国文研本・慶應本の位置

図1は桐壺について、正徹本奥書本以外も含めた23伝本の仮名種類数と漢字含有率を示したものである。国文研本は「◆研」、慶應大本は「◆慶」で示した位置にある。国文研本は〔漢字含有率〕7.1%，〔仮名種類数〕98種、慶應大学本は〔漢字含有率〕9.0%，〔仮名種類数〕100種であった。

図2は花散里について、正徹本奥書本以外も含めた22伝本の仮名種類数と漢字含有率を示したものである。国文研本は「◆研」、慶應大本は「◆慶」で示した位置にある。国文研本は〔漢字含有率〕12.0%，〔仮名種類数〕80種、慶應大学本は〔漢字含有率〕11.9%，〔仮名種類数〕84種であった。





4.4 漢字含有率 ——改行の一致状況と運動

「1桐壺」の漢字含有率は、国文研本 7.1%，慶應大本 9.0%で、数値的には差が少ないよう感じられる。しかし、図1のように諸伝本と並べて見ると、2本の横軸での差は大きいことに気付かされる。慶應本の漢字含有率は、諸伝本の中央値 9.3%をやや下回る程度であるが、国文研本の漢字含有率は諸伝本の中での最小値となっている。

一方、「11 花散里」の漢字含有率は、国文研本 12.0%，慶應大本 11.9%とほぼ同率である。図2のように諸伝本と並べて見ると、横軸で2写本だけが他の写本から離れて、高い漢字含有率となっている。2写本の次に漢字含有率の高い九大古活字本（◇九）9.1%と比べても約3%の隔たりがある。

国文研本と慶應大学本の漢字含有率が「1桐壺」と「11花散里」との間で様相を異にすることは、3.2, 3.3で見てきたこととも矛盾しない。改行に注意を払う場合（A群「11花散里」）は、漢字の使用箇所にも注意が払われているのである。したがって、漢字／仮名の違いについては、注意深い書写行為においては、写しとるべきものに属していたという解釈が補強できる。

4.5 仮名種類数 ——書写者の個性と伝本の属性

「1桐壺」の仮名種類数は、国文研本98種類、慶應大本100種類で、一致しないが、図1のように諸伝本と並べて見ると、縦軸で2写本は近い位置にあることが分かる。

「11花散里」の仮名種類数は、国文研本80種類、慶應大本84種類で、やはり一致しないが、図2のように諸伝本と並べて見ると、縦軸で2写本は近い位置にある。

使用された仮名字種数が一致しないことと、諸本と並べたときに近い位置にあることどちらに重きを置いて解釈したらよいのか慎重な判断が求められるところである。

まず、仮名字種数が一致しないことについて考えてみたい。慶應大本の書写者は、国文研本の書写者よりも、仮名字種を2~4種多く使ったことになる。ただし、単純に、慶應大本の仮名字種が多いだけではない。国文研本に使われていて慶應大本に使われない仮名も見られる。実際に使用された仮名字種の違いは、表4に一覧したとおりである（変体仮名はその字母で示した）。

表4 使用された仮名字種の違い

	1 桐 壺	11 花 散 里
国文研本だけで使われた仮名	具	か 盈
慶應大本だけで使われた仮名	丹 農 羅	す は 気 耳 楚 丹 屋

2写本間に見られる仮名種類数の違いは、書写者の個性が入り込んだ結果ではないだろうか。意識的か無意識的かは分からぬが、書写者によって使用される字種の選択は異なっている。

次に、諸本と並べたときに近い位置にあることについて考えてみる。諸伝本と並べて見た場合、2写本の縦軸での距離はさほど離れていない。別の伝本に目を移すと、高松宮本（◇高）と尾州家本（◇尾）が、図1でも図2でも近い位置にある。高松宮本と尾州家本は、河内本系統の本文を有しており、その点で属性を同じうすると言えるものである。国文研本と慶應大本とは、正徹奥書本としてやはり属性を同じうする本文である。同じ属性にある本文間では、使用される仮名字種数が近い数字に収まっていると考えられる。したがって、前段落での書写者の個性は、大勢には影響を及ぼさない範囲でしか發揮されていないことになる。

正徹奥書本という同じ本文属性にある国文研本と慶應大本の間では、「使用される仮名字種が少し異なる」と同時に「他の本文属性の諸本と比べると、使用される仮名字種数が近い数字に収まっている」という状況にある。前者は書写者の個性の反映であり、後者は伝本の属性の反映である。そして前者は、文字使用の大勢には影響を及ぼさない範囲でしか發揮されていない。

いずれにしても、仮名字種の選択は、改行箇所の一致状況とは関連が見出せない。一致が少ない場合（E群「1桐壺」）でも、一致が多い場合（A群「11花散里」）でも、仮名種類数に多少の差は生じているし、諸伝本と並べて見ると2写本の位置は近いのである。したがって、2写本

の書写行為においては、仮名字種の選択は、書写者によって変動が生じる性質のもので、原本の字母までを写しとるべきものとは認識されていなかったと考えられる。

まとめ

国文研本と慶應大学本との比較によって、本稿で述べたことの概要は、以下のとおりである。

1. 国文研本と慶應大本とは、奥書が共通することと校異の少なさとによって、類似する写本と判断できるが、書写態度は同一ではない。改行箇所について比較すると、改行箇所の一致が多い巻と一致が少ない巻とがある。
2. 改行箇所の一致が多い巻（改行に注意が払われた巻）は、正徹奥書祖本の改行箇所を知るための材料となりうる。一方、改行箇所の一致が少ない巻（改行に注意が払われていない巻）では、その書写態度によって祖本の改行箇所が見えにくくなっている。改行箇所の一致が少ない巻は、初めの方の巻に集中しており、奥書を有する巻ほど改行箇所に不一致が生じている。
3. 同一箇所の同一語を漢字で書くか仮名で書くかという文字種選択については、改行箇所の一致が多い巻で差が少なく、改行箇所の一致が少ない巻では差が目立つ結果となった。漢字／仮名の選択は、注意深い書写においては、写しとるべきものに属していた。
なお、「給」／「たま」の表記について、「1 桐壺」と「11 花散里」を比較すると、国文研本で仮名「たま」が多いのは特異な状況に見える。E 群に属する巻において、改行箇所に注意が払われず、漢字／仮名の違いが写しとられなかつたのは、国文研本の方という可能性が高い。
4. 文字使用の状況として〔漢字含有率〕と〔仮名種類数〕との二面から分析した。
 - (1) 〔漢字含有率〕について見ると、改行に注意を払う場合は、漢字の使用箇所にも注意が払われている。漢字／仮名の違いは、注意深い書写においては、写しとるべきものに属していたことが再確認できた。
 - (2) 〔仮名種類数〕について見ると、仮名字種の選択には、書写者の個性と伝本の属性とが反映されている。正徹奥書本という同じ本文属性にある国文研本と慶應大本の間では、「使用される仮名字種が少し異なる」と同時に「他の本文属性の諸本と比べると、使用される仮名字種数が近い数字に収まっている」という状況にある。前者は書写者の個性の反映であり、後者は伝本の属性の反映である。そして前者は、文字使用の大勢には影響を及ぼさない範囲でしか發揮されていない。

仮名字種の違いは、改行箇所の一致状況にかかわりなく見られる。2 写本の書写行為において、仮名字種の選択は書写者の恣意に属すもので、原本の字母までを写しとるべきものとは認識されていなかった。

国文研本も慶應大本も、近世初期の写本とされている。この2写本を比較した範囲では、漢字／仮名の違いは、慎重な書写態度であれば写しとるべきものに属していた。改行箇所に注意が払われない書写であると漢字／仮名の違いは写しとられていない。一方、仮名字種（異体仮名）は、写しとるべきものに属していなかった。同音の仮名についての包括意識が存在していたことになるが、同音の仮名に対する意識については稿を改めたい。

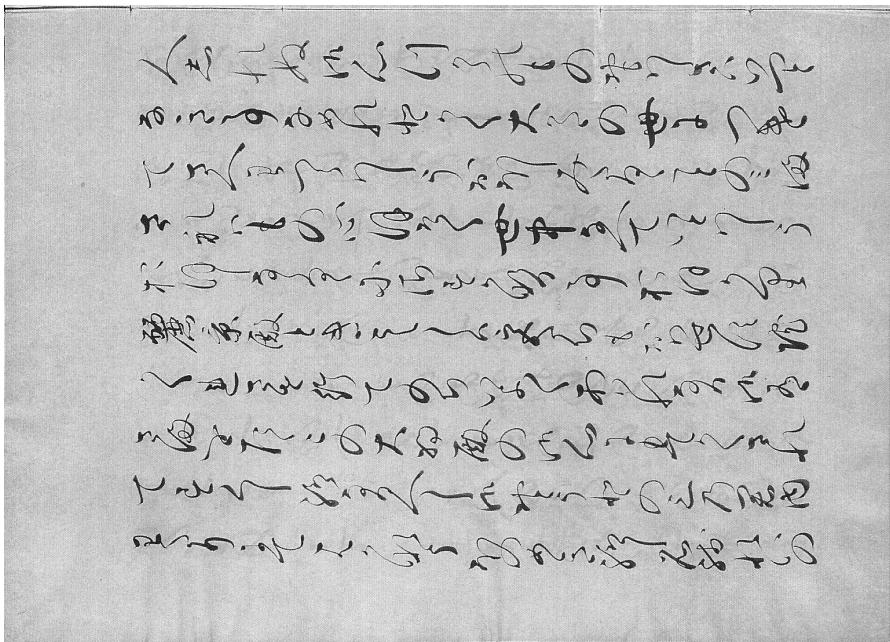


写真2 「花散里」慶應大本 1丁表 (A群)

[原本所載：慶應義塾図書館 複製禁止]

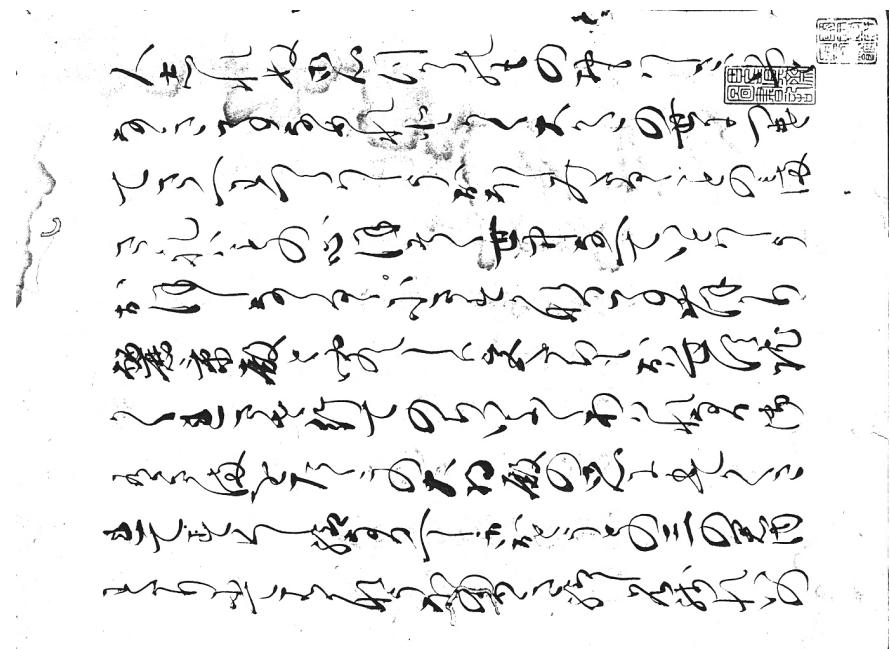


写真1 「花散里」国文研本 1丁表 (A群)

[原本所藏：人間文化研究機構国文学研究資料館 複製禁止]

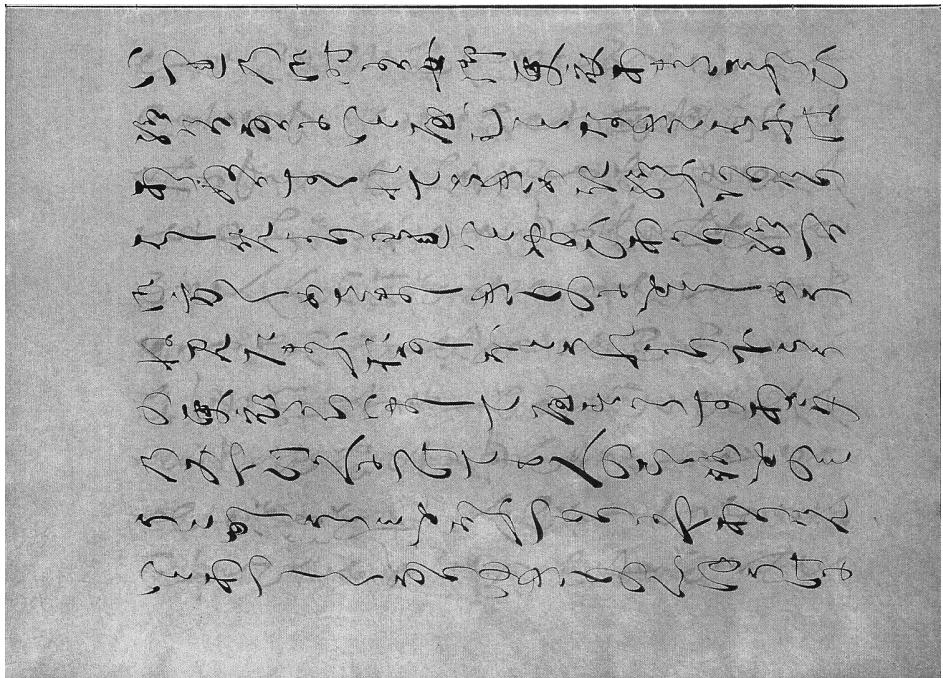


写真4 「桐壺」慶應大本 1丁表 (E群)

[原本所藏：慶應義塾圖書館 複製禁止]

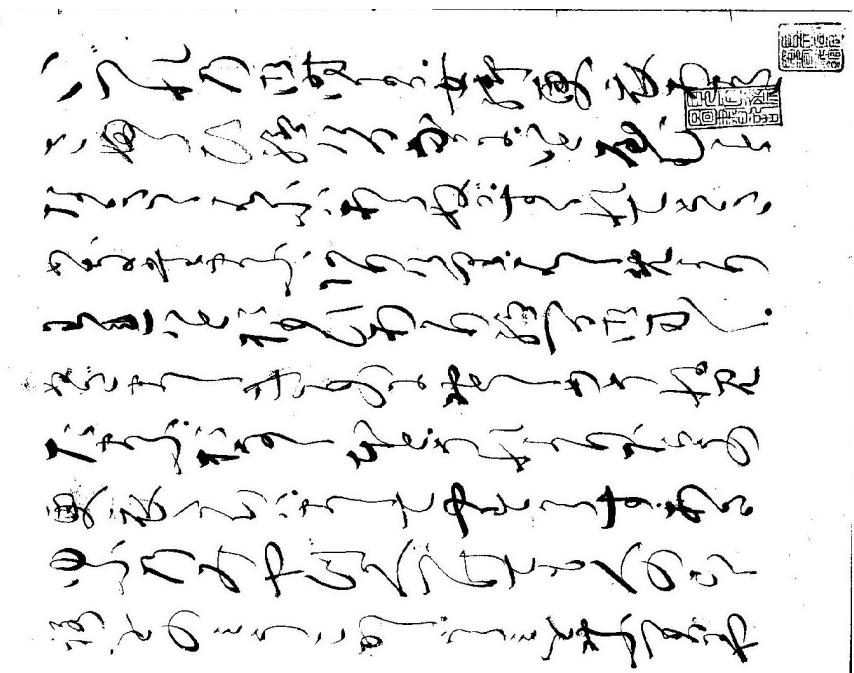


写真3 「桐壺」国文研本 1丁表 (E群)

[原本所藏：人間文化研究機構国文学研究資料館 複製禁止]

参考文献

- 伊藤 鉄也（2002）「新収資料紹介 49 源氏物語 江戸初期写五十四帖」，『国文学研究資料館報』59，国文学研究資料館
- 今西 祐一郎（2009）「〈表記情報学〉としての『源氏物語』研究」，『むらさき』（紫式部学会編）武蔵野書院，pp.52-55
- 慶應義塾図書館（2007）「15〔源氏物語〕54 卷〔紫式部〕」，『義塾図書館を読む～和・漢・洋の貴重書から展』，慶應義塾図書館，pp.21-22
- 加藤 洋介（2001）「室町期の源氏物語本文 一三条西家本と正徹本と」，『国文学 解釈と教材の研究』46-14，学燈社，pp.54-60
- 久保木 秀夫（2006）「冷泉為相本、嘉吉文安年間における出現 一伝一条兼良桐壺巻断簡、及び正徹本の検討から」，『源氏物語の始発 一桐壺巻論集』，竹林社，pp.534-555
- 菅原 郁子（2010）「正徹本のありかとゆくえ」，科学研究費補助金基盤研究(A)「源氏物語の研究支援体制の組織化と本文関係資料の再検討及び新提言のための共同研究」（國學院大學）
2010年11月13日発表資料
- 前田 富祺（1971）「仮名文における文字使用について—変体仮名と漢字使用の実態」，『東北大教養部紀要』14，東北大学教養部，pp. 99-134

付記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究(A)「日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究」（国文学研究資料館・代表者：今西祐一郎）及び、国立国語研究所共同研究プロジェクト(C)「仮名写本による文字・表記の史的研究」（平成21年度・代表者：斎藤達哉）の研究成果の一部である。

写真1、写真3は人間文化研究機構国文学研究資料館、写真2、写真4は慶應義塾大学三田メディアセンターの許可をそれぞれ得た上で、許可条件に則って掲載したものである。ここに記して両機関に御礼申しあげる。